

12 世紀ヒルザウ系修道院の知的ネットワーク－書物の移動、人の移動－

12 世紀の南ドイツを中心とする地域では、多くの修道院で改革が志向されていた。改革の発端となったのはシュヴァルツヴァルトのヒルザウ修道院であり、ヒルザウ修道院長ヴィルヘルムはクリュニーの慣習律を基に新たな慣習律（ヒルザウ慣習律）を作成した。この慣習律を取り入れた修道院はヒルザウ系修道院として、独特な知的ネットワークを形成した。このネットワークの結節点となったのがアルマリウス（armarius）という役職を担った修道士たちである。アルマリウスとは本来、修道院内部で書庫の管理とミサの指揮を主に行っていた役職であったが、ヒルザウ慣習律では新たに職能が追加され、修道院外部との書物の遣り取りも管理するようになった。このアルマリウスの活動を彼らが残した書簡などから検討し、ヒルザウ系修道院の知的ネットワークの特徴を書物の移動と、人の移動の二つの面から見出すことが本報告の目的であった。具体的な考察対象として、ラインハルツブルン修道院のアルマリウスであったシンドルト、そしてアドモント修道院でアルマリウスとして活動していたと推測されるイリンベルト、以上 2 名の修道士を選択した。

ラインハルツブルン修道院で 1156～1168 年までアルマリウスを務めていたシンドルトは、100 通を超える書簡を編纂している。その書簡集の中には書物の遣り取りに関するものも多い。それらの書簡からシンドルトによる書物の取り寄せの方法を検討すると、次のような傾向が示唆される。すなわち、シンドルトは書物を外部から取り寄せようとする際、複数の修道院に書簡を送るのではなく、特定の修道院に所属する特定の個人（リッポルツベルク修道院の修道士グンター。リッポルツベルク修道院の蔵書に精通し、蔵書目録も作成した人物）に要請していたのである。また、リッポルツベルク修道院以外から書物を取り寄せる場合にも、当該の書物は一度リッポルツベルク修道院を経由してラインハルツブルン修道院に届けられた。以上のことなどから、書物の遣り取りに関しては、まず人的な関係（ここでは、シンドルトとグンターの関係を指す。シンドルトはリッポルツベルク修道院を自身も訪れ、その際にグンターと面識を持ったと推測される）が重視され、その関係が築かれた上で特定の書物が複数の修道院を移動していたと考えられる。

アドモント修道院は 12 世紀中頃から、ヒルザウ改革の一つの中心として複数の修道院へ修道士、修道女を派遣していた。アドモント修道院でアルマリウスを務めた人物は、いずれも他の修道院へ院長として派遣されたことがアドモント年代記に記されている。今回言及したイリンベルトは死者記念帳（当該修道院に関係する故人の名簿）ではアルマリウスとは記録されていないが、その経歴（書物の製作とその監督、修道女たちへの説教などを行っていたことなど）からアルマリウスとして活動していたと十分考えられる人物である。1160 年に、イリンベルトはバンベルク司教区のミヒャエルベルク修道院とパッサウ司教区のクレムスミュンスター修道院の双方から修道院長に選出され、着任を要請されている。しかし、イリンベルトの選出に関連する書簡を検討すると、クレムスミュンスター修道士たちはイリンベルトの選出に抵抗していたことが明らかになった。数ヶ月にわたる書簡の遣り取りの後、最終的にイリンベルトはミヒャエルベルク修道院の院長に就任している。ではクレムスミュンスター修道士たちがイリンベルト派遣に抵抗した理由は何であったか。クレムスミュンスター修道士たちを説得したというザルツブルク大司教の書簡によると、クレムスミュンスター修道士たちの危惧はイリンベルトが院長に就任することで修道院の「読み方と歌い方の慣習」が変わってしまうことにあった。「読み方と歌い方」とはアルマリウスに密接に関わるも

のである。アルマリウスを務めた人物が他の修道院へ派遣されていること、アルマリウスを務めた人物の派遣によって「読み方と歌い方」の慣習の変化が想定されていたことなどから、アルマリウスが派遣されることで「読み方と歌い方」の慣習が伝播するという知的なネットワークがヒルザウ系修道院間に形成されていたと推測される。